

四 珪化木（木蛋白石）

珪化木というのは一種の化石でもある。しかし一名木蛋白石とか木瑪瑙とも呼ばれて、一種の蛋白石でもある。

蛋白石が出ている讃岐のことだから、木蛋白石である珪化木が出るのも或る意味で当然であろう。

その昔、讃岐ではこの珪化木のことを、「栗化石」と呼んだ。

そのわけは、古文献を見ると了解できよう

「讃岐名勝図絵」に、「寛政年中より五剣山の北の麓から化石が多く出る。その玲瓏堅剛、玉の如し、印章に彫し、研など製し甚だ雅なり、むかし、弘法大師の植えし八本の栗樹の根にやあらんといへり」と述べている。つまり寛政年間に初めて化石として珪化木が発見されたわけである。

五剣山は八栗寺の山である。寺の伝説には、「弘法大師が栗の実を八つ…しかもそれを焼いて、この山に埋めた、もしこのところに寺を建立してよいならば、この焼栗の種から芽ばえよ、もし、悪るければはえるなよ…と吉凶をうらなつた…云々」というのがある。

それで珪化木が発見されると、この伝説に因んで、これはお大師さまの植えた八本の栗の木が石になったという解釈が出来て、「栗化石」と云うので名高くなつたものである。

この五剣山から珪化木が発見された寛政年間には五剣山麓に生れた柴野栗山が天下の積学として名声をはせていた時である。それに、栗山先生は当時すぐれた愛石家でもあったので、誰が贈呈したのか、江戸の栗山先生は、この「栗化石」…珪化木を持っていた、ということが、小田徳三氏の随筆に載っている。

寛政年間発掘されてから後一時、その採出を禁じていたが、何分、当時は、文人墨客がこれで硯を作ったり、印章に用いたり、愛石家が庭石に飾ろうとして

珍奇を好む地方の名士も多かったので、現在も、この「栗化石」―五剣山の珪化木が各地で見られる。

坂出の鎌田氏所蔵のものは大木の根元の部分で、同氏の郷土博物館に大石となつて横たえてある。炭化した炭素のため黒色の艶のよい蛋白石が木質部と交代してはいり込んでいる、五剣山出土の大木で見事なものである。

善通寺では、善通寺第一高校―その校門をはいった玄関軒下のところに灰白色の珪化木が立てられている。

これは木徳町にあった旧家和气氏の庭石であったもの、何分、旧藩時代殿様のご巡行の節には宿泊せられた程の大邸宅であった同氏の庭石―それが同家の退転で、学校に移されたもの、これは風化の程度がひどく蛋白石質の部分も光沢を失なっている。

しかし、この二つの例で見ても地方の名家が、珍らしいこの「栗化石」を遠くから運んで庭石として愛玩していたかを偲ばせているように思われてならない。

産地五剣山に近い、高松近在には勿論、多く見かけられる。

地元の六万寺：この古い寺の庭には廻り一丈ばかりの大木、艶の出た蛋白石の木理がよく見える逸品である。これは昭和六年、源氏ヶ峯の草原で発見したものだという。

古高松の小学校―屋島の小学校にも庭石として飾られているし、名園栗林公園：その富士山に摸した山上にもこの珪化木があるが、みな五剣山、源氏ヶ峯産のものである。

出土する源氏ヶ峯は世俗、白粉石（白色の安山岩質凝灰岩）や厚い粘土層がある。この粉土層は、牟礼の人が、瓦を焼く原料に使用しているが、その粘土質層や、白粉石の中から出土している。

五剣山の珪化木の外に讃岐では、小豆島からも出る。小豆島に行つて見ると、町並の家の軒下などに珪化木の小塊を飾石にしているのに気づく。これらの珪化木は大鐸村の肥土山：そこからとれるものである。

この肥土山は第三紀層の地質で、薄い炭層も含まれて質の悪い亜褐炭が出る。この褐炭は木理もよくわかる程で、まず埋木に近い。それで俗語には岩木いわきと称せられているものだ。その褐炭の出る炭層中から出土している。

東北仙台に産する埋木細工―その埋木の産地から、立派な珪化木を出しているが、讃岐の小豆島…その珪化木の産地、肥土山は、ちようどそれに似ているといえよう。

蛋白石のところ述べた―坂出の角山―、私は、ここでも珪化木を見つけた。山頂の西側を少し降りたところから、破片になって土中に散乱していた。

雨あがりで、山の地肌もしめっていたが、その土の中から鮮やかな黒色の小さい石片が目についたので、もしや黒曜石ではないかと手にとって見た。それから近くを探つて見ると、矢根石（石鏃）らしい形のものも拾ったので驚いた。これは、てつきり石器時代の遺跡か…と、続いて私の脳裏にひらめいたのは、「それにしても、サヌカイトの産地である讃岐に、黒曜石を原石とした石鏃…、これは大変な発見かも知れぬと」

ところが、その後、出土する大型のものをみると、灰白色の部分があり、手にとつて見ても軽く、黒曜石とは全く違つたものであることが判明した。珪化木と早く気がつかなくかつたのは、あたり一面の土中に硝子破片や小礫のように散乱していたからであつた。よく石肌を見ると黒質の中に細胞組織のようなものが、明瞭に出ているので、五剣山あたりの珪化木をわざわざ高いこの山の頂上近くまで持つて来て破片にくだいて捨てたとも考えられない。この山にも珪化木が出土すると思つた。採集した破片も九大に送つて詳しく検鏡してもらつたところ、破片になつていても、明らかに珪化木であることの立証を得ることが出来た。

それで、角山は蛋白石と珪化木……をそれぞれ出土しているわけである。そのいずれもが、基盤の花崗岩とそれを貫く安山岩の接触部で、産出しているのだ。このことは、そのあたりに地質学上、讃岐層群と呼ばれている、火山成堆積層の存在を立証するものである。

讃岐層群は第三紀に讃岐の台地状、円頂丘状の山々をつくつた讃岐岩類（主と

して安山岩) の噴出以前に存在した地表とも考えられるからである。五剣山の珪化木もそこに繁茂していた樹木であろうし、三豊の七宝山群に属している高尾下山山頂の近くに、白色の凝灰山があつて、そこにブナ、クヌギ、ケヤキ、タケ(笹石)などの化石すら出しているのも水成岩層のない火山岩地帯に一見不思議のように思われるが、讃岐層群の存在を示すものである。

ともかく、讃岐には、蛋白石：その一種の化石か木蛋白石の珪化木を産出している。

讃岐には古い文献は残っていないが、寛政の「栗化石」といわれた五剣山の珪化木出土以前、有名な近江の石亭：全国の石を蒐集した愛石家木内小繁：その著「雲根志」には、その瑪瑙のところ、こう書いている。

「讃岐国より黄色の物を産す：」と、これは、今から考えると、讃岐の蛋白石：それが近江の石亭に蒐集されていたことを物語っているものである。